

2. 現在までの研究状況 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述すること。様式の改変・追加は不可(以下同様))

- ① これまでの研究の背景、問題点、解決策、研究目的、研究方法、特色と独創的な点について当該分野の重要文献を挙げて記述すること。
 ② 申請者のこれまでの研究経過及び得られた結果について、問題点を含め①で記載したことと関連づけて説明すること。
 なお、これまでの研究結果を論文あるいは学会等で発表している場合には、申請者が担当した部分を明らかにして、それらの内容を記述すること。

① 私の研究は、20世紀前半のヨーロッパにおいて登場した「政治の審美化」という概念について、**思想史的に解明することを大きな目的としている。**

「政治の審美化」とは、ヴァルター・ベンヤミンの論文『複製技術時代における芸術作品』で初めて提出された概念であり、戦争に用いられる技術やその技術による破壊行為を美的＝感性的に賛美するイタリア未来派に対して批判的な意図によって与えられたものである。「政治の審美化」概念は第二次世界大戦後の思想界で著名となり頻りに引用されるに至ったが、ベンヤミンの当該論文のあとがきでやや唐突に言及されたに留まったことが災いして、引用者の政治的対立者に対するレッテル貼りとしてのみ使用される傾向にあり、**この概念そのもののメカニズムについては一部を除いて解明がなされて来なかった傾向にある。**

そこで、第一次世界大戦以降の思想界において、「政治の審美化」、つまり戦争技術や大量破壊を美的に謳う言説が、**どのような内的論理に基いて提示されたのか、どのような経緯・背景によって登場するに至ったのか、さらに「政治の審美化」概念に対して為されてきた批判は結局のところ妥当であったのか、**といった論点について、改めて検討する研究が要請されることになる。しかし、このような問いに答えるためには、ベンヤミンやその影響を受けたアドルフ・フランクフルト学派による「政治の審美化」に批判的な立場から行われた言及のみを読解対象としていては不十分であり、むしろ逆に「政治の審美化」に親和的な立場の著作に即し、**その論理を内在的に辿りなおす過程が必要不可欠である。**

上記の意図の下で、「政治の審美化」に肯定的な立場の思想家として、**エルンスト・ユンガーを取り上げる**ことにする。ベンヤミン(1892-1940)とほぼ同時代人であるユンガー(1895-1997)は、第一次世界大戦に従軍した時の体験に基く著作によって文筆家としてデビューして以来、20世紀末に102歳で死去するまでの期間、一貫して保守的かつナショナリスト的作家として小説やエッセイを著してきた。ユンガーの創作上・批評上の主要なテーマの一つとして挙げられるのは戦争であったが、特に**初期(両大戦間期)のユンガーには、戦争を考察・表象する際に、倫理的な関心を一旦は捨象した上で美的な関心によって捉えなおす傾向が顕著に見られるため、政治と美学という二項を媒介する思考についてのケーススタディとして適当であると考えられる。**

エルンスト・ユンガーは、現代ドイツの主要作家の一人として、その生前から既に多くの研究の対象とされてきた。しかし、それら**先行研究においてはユンガーの著作の持つ美学的な意義と政治的な意義が別々に論じられる傾向にあった**と言える。K・H・ボーラーは目下のところ最も包括的なユンガー研究である *Ästhetik des Schreckens* において、衝撃や驚愕の経験を媒介とすることで、初期ユンガーの戦争を主題とした批評がボードレーラ 19世紀以来の唯美主義の発展形態であることを指摘した。この研究はユンガー美学の文学史的・思想史的解明としては大きな意義を持つものであるが、ユンガーにおける美的経験が戦争やテクノロジーに彩られた政治的現実と分かち難く結びついたものであることは十分に論じられていない。また、C・クロコウ (*Die Entscheidung*) や川合全弘 (『再統一ドイツのナショナリズム』) といったユンガーの政治思想を主として論ずる研究者は、逆にユンガーの持つ美的意義を切り離して考える傾向にあると言える。だが、「政治の審美化」を究明する目的のためには、**ユンガーにおける美学と政治を共に論じ、両者を関係づける内在的論理を明らかにすることが不可欠である。**

このような見通しの下、初期ユンガーを讀解する際には、特に**ユンガーの機械論**に焦点を当てることとする。機械論に着目するのは、近代的なテクノロジーによって作られた機械とは、戦争の遂行のために武器や宣伝用メディアの用途で用いられると同時に、兵士や戦闘が描写される場合には美的な価値を付与される存在であるためである。この**機械の持つ政治(戦争を含む)と美学を媒介する性格が、当初の目的であった「政治の審美化」の解明に寄与することになる。**

② ①で行ったような先行研究の批判的受容に基いて、修士論文を作成している。表題は「エルンスト・ユンガーの美学—政治的機械論(仮題)」とし、ユンガーの初期(戦間期)における戦争・政治を主題とした複数の著作について、その機械論に焦点を当てて「政治の審美化」の内在的な読解を試みることを主要な目的とする。初期著作として取り上げられるものとしては、『森林125号——塹壕線からの年代記』(1918)、『内的体験としての闘争』(1922)、『鋼鉄の嵐の中で』(1926)、『労働者』(1932)といったエッセイ・批評が中心となる。

この修士論文において設定される問いは、**1) ユンガーの機械論はどのような論理に基いて政治と美を媒介していたのか、2) ユンガーの機械論に対して行われてきた批判は妥当であったか、或いは他に想定される批判にはどのようなものがあるか、3) ユンガーの機械論に時代的制約を超越した理論的意義を見出せるかどうか、或いは見出せるとしたらどのような意義か、**の3つである。これらの検討のため、第1章から第3章までがそれぞれ当てられることとなる。

1. 序章では、①で述べたような、「政治の審美化」の解明のためになぜユンガーの機械論を取り上げる必要があったかに関する経緯をまず詳述する。

2. 第1章では、上記の問題設定に基いて、戦間期ユンガーの機械論の論理展開を内在的に辿り、**包括的に叙述することを試みる。**具体的には、『労働者』に至るまでの初期著作から、戦争や政治に用いられる機械についての思索を抽出し、それらが美的に称揚されるに至る過程を検討する。

申請者氏名 長谷川晴生

(現在までの研究状況の続き)

本章では、20世紀初頭におけるテクノロジーの発展の実態に即して、「機械」のイメージを「力学的機械」と「媒体的機械」の二つに分割して考えることを提案する。「力学的機械」とは、エネルギーの供給によって人間を上回る力を作動させる古典的な機械のイメージことであり、ユンガーにおいては兵器としての機械がこれに相当する。他方、「媒体的機械」とは、映画や録音のようなメディア技術によって可能とされた機械のイメージであり、ユンガーの時代に至って初めて登場したものである。ここでは文学的想像力とそのメディア技術的背景の関わりについての先駆的研究であるF・キットラーの *Grammophon, Film, Typewriter*などを参照しつつ、総力戦という政治的現実を思索の対象とすることで、ユンガーがこの両方の機械イメージの相補性に意図せずして言及してしまったことを明らかにする。

3. 第2章では、ユンガーの機械論について加えられてきた、或いは加えられることが予想される批判についての検討を行う。このうち第一節では前者を、第二節では後者を対象とすることになる。

第1節で扱うのは、いわゆる左派的な立場からなされたユンガー機械論批判である。第二次世界大戦後のユンガーは、保守系の大物作家として賞賛される一方で、リベラリストからは常に美的ナショナリストとして批判の対象になってきた。ここではそのようなユンガー批判の中から、クロコウらの機械論に関わる部分を選んで取り上げることになる。次に第2節では、想定される批判として、ベンヤミンの「政治の審美化」として行ったイタリア未来派批判をユンガーに対しても行った場合、ユンガー機械論がどのように論じられるかについて思考実験として考える。

4. 結論部分に当たる第3章では、ユンガー機械論の特徴(第1章)と各批判との照合(第2章)を踏まえた上で、ユンガーの機械論の持つ理論的意義について考察する。ここでも、前章に引き続いてベンヤミンが比較対象となる。ユンガーは、近代的テクノロジーによって支えられた総力戦状況を美的に表象し続けたことによって、力学的機械と媒体的機械の相補的な性格を見出すことができた。他方、メディア理論家でもあったベンヤミンは専ら媒体的機械である映画について言及し、映画がその受容者である大衆に与える影響について希望を持ち続けたが、力学的機械という機械のもう一つの暴力的側面を考察し得なかったため、ベンヤミンはユンガーよりもむしろ楽観的に過ぎる機械観を持っていたことになる。このようにメディア論という観点を導入した時、ユンガーの機械論はファシズムへと向かう時代背景を超越した普遍的な意義を有することが結論付けられるのである。

以上の検討によって、先行研究で看過されてきたエルンスト・ユンガーにおける「政治の審美化」の理論的意義が、ユンガーの機械論を通じて明らかになるといえる。

3. これからの研究計画

(1) 研究の背景

2. で述べた研究状況を踏まえ、これからの研究計画の背景、問題点、解決すべき点、着想に至った経緯等について参考文献を挙げて記入すること。

上で述べた修士論文によって明らかにされたのは、エルンスト・ユンガーの機械論の美学的—政治的な意義であった。だが換言すれば、これは20世紀前半というメディアとしての機械が勃興した時期に限定された論点に過ぎないということになる。ここで解決すべき問題として残されるのは、ヨーロッパ思想史の全体において「政治の審美化」がいかにして現れてきたのか、という通時的な問いである。そこで次のステップとしては、修士論文で行った共時的アプローチを補完するものとして、改めて通時的アプローチを試みる必要があると考えられる。

とはいえ、「政治の審美化」とは広範囲に関係を持つ概念であるため、これをそのままテーマとすると、論点が拡散しすぎることになり、明快に議論を展開させるという点で困難を来すことが予想される。また、そもそも「政治の審美化」はベンヤミンの1930年代の論文で提出された概念であるため、通時的なアプローチを行う際には、20世紀序盤という時期を超えて全時代にとって自明なものとして該当することを前提にはならない、という問題も存在する。

そこで、これからの研究においても、引き続き1) 修士論文で扱ったエルンスト・ユンガーやヴァルター・ベンヤミンらによる20世紀初頭の機械についての論調を機軸とした上で、2) ヨーロッパ思想史における各時代の機械観を改めて叙述し、3) 通時的な視点を持ってこの両者の比較研究を行う、という方法を選択する。この研究手法によるのであれば、ヨーロッパでの通時的な機械観の変遷を明らかにすることができる上、各時代の機械観を媒介として、「政治の審美化」がいつから存在したのか、或いは「政治の審美化」は後期近代特有の問題なのか、といった問いに対しても有効な接近を試みることができる。

このような、機械の思想史を媒介とした美学—政治思想史の試み自体は、従来であればほとんど為されてこなかった研究である。しかし、ミシェル・フーコーが『知の考古学』を標榜して以来、前者については論じられることが増えたのは事実である。フーコーに続くものとしては、前出のF・キットラーによる *Aufschreibesystem 1800/1900* (19・20世紀)・*Grammophon, Film, Typewriter* (20世紀)・*Musik und Mathematik* (古典古代)などの著作が存在しており、先駆的な研究として知られている。

上記のような研究を参照しつつ、機械の思想史に美学的視点や政治的視点を加えることで、新たな美学—政治思想史を構成し、ひいては「政治の審美化」の通時的な解明が可能になるのではないかと考えている。

申請者氏名 長谷川晴生

(2) 研究目的・内容 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述すること)

- ①研究目的、研究方法、研究内容について記述すること。
- ②どのような計画で、何を、どこまで明らかにしようとするのか、具体的に記入すること。
- ③共同研究の場合には、申請者が担当する部分を明らかにすること。
- ④研究計画の期間中に異なった研究機関 (外国の研究機関等を含む) において研究に従事することを予定している場合はその旨を記載すること。

① 私の研究の大きな目的は、**ヨーロッパの機械の思想史を媒介として、ヨーロッパ思想における「政治の審美化」を通時的に探求し、ヨーロッパ世界の美学—政治思想史を叙述する**ことにある。

この目標を達成するためには、(1) で述べたように、まず「政治の審美化」が具体的に問題として提出された**1) 20世紀前半(両大戦間期)のヨーロッパにおいて、政治・軍事に使用されると共に美的な称揚の対象ともなった機械を媒介として、政治(戦争も含む)と美が結び付けられたという思想的状況の分析**が、まず行われる必要がある。ここでは当然、エルンスト・ユンガーの機械論をテーマとし、ヴァルター・ベンヤミンのメディア論との比較研究も行った修士論文の成果が踏まえられ、ユンガーの機械論を一つの着目点として設定することとなるが、ユンガーに対する比較対照をベンヤミンに限定せず、機械やテクノロジーについて言及した思想家や芸術家を複数人取り上げ、20世紀前半のヨーロッパで行われた機械を媒介とした政治と美の結合について、広く叙述することを試みる。次に、時代を遡及し、**2) 20世紀以前の各時代における機械観を明らかにすることを試みる**。とはいえ、機械の思想史の通時的研究とは言っても、あくまでも「政治の審美化」の通時的解明のための媒介として行っているものであるため、機械が政治と美・感性を媒介していることが認められる事例を中心として論じることとなる。これに続いて、**3) 20世紀後半以降、即ち戦後世界における機械観の叙述**を行う。これによって、最初に行った戦間期の機械観を加えて、「政治の審美化」という一貫したパースペクティブの下、ヨーロッパにおける全時代の機械観が明らかにされたこととなる。なお、思想史研究であるため、読解対象として使用するのは、批評や詩・小説が主体となる。続いては、**4) 以上で得られた成果を基盤として、通時的な比較研究を行う**。この際に基準とするのは、ユンガーやベンヤミンの時代である。20世紀以前の各時代と20世紀前半を比較することによって得られるのは、メディアとしての機械が登場する以前・以後の差異であり、20世紀前半と20世紀後半以降の比較を通じては、旧メディア(映画・録音)と新メディア(テレビからインターネットに至る)の差異、加えて核兵器など大量破壊兵器が登場する以前と以後の差異である。このような点から、**20世紀前半を分水嶺として機械の思想史の通時的比較を行うことが適当である**と判断した。最後に、4)の比較研究を踏まえた上で、**5) 機械を媒介とした「政治の審美化」の起源についての結論を抽出し、現在(21世紀初頭)の状況に即した機械・美・政治の三者関係に関する展望を模索する**。

② 上のような目的・方法の下、具体的な計画は以下の通りである。現時点では、以下はそのまま博士論文の目次を構成することが予定されている。

1. まず、エルンスト・ユンガーの機械論の比較対象として、同時期(戦間期)の段階における他の思想家・芸術家の機械論を扱う。修士論文ではベンヤミンのメディア論が選択されたが、ここではさらに、**ハイデガーやイタリア未来派(マリネッティら)が比較対象**となる。思想的にはユンガーらに近いとされるハイデガーは、一貫して近代的テクノロジーに対して否定的な態度を示し、機械の存在に美的価値を与えることはしなかった。また、正に「政治の審美化」として批判された未来派は兵器を美的に賛美したものの、メディアとしての機械に対する関心は薄かった。彼らとユンガーやベンヤミンを比較することで、戦間期ヨーロッパの機械・美・政治の三者関係を明らかにすることを試みる。資料としては彼らの論文の他、場合によっては往復書簡を用いる。

2. 次に、1で検討した時代の以前と以後の機械観を扱う。20世紀以前の時代としては、主として古典古代と初期・中期近代(17世紀から19世紀)が検討の対象となる。前述のように「政治の審美化」を媒介する**機械の観点からの研究であるため、高度に発達した政治組織と技術を兼ね備えた時代・場所ですべては対象とできない**ためである。古典古代ではアリストテレス『政治学』やウィトルウィウスの著作などに見られる**機械論を、初中期近代では哲学者・神学者の著作から抽出することが出来る機械観などを扱う**。20世紀後半以降については、**政治的・哲学的著作で「機械」の隠喩を好んで用いたドゥルーズなどポスト構造主義に属する思想家が検討される**。

3. 1で分析された時代を基準点とした上で、2で検討された各時代との間の通時的な比較を行いながら、機械の思想史を媒介としてヨーロッパの美学—政治思想史を叙述することを試みる。2で明らかになったように、機械によって美と政治が媒介されるのはごく限定された時代・場所のことでしかなく、特に古典古代と初中期近代は時代的に断絶しており、**影響関係による連続的な思想的推移を辿ることは困難**であるが、20世紀前半を基準とすることで、**メディア以前以後・新旧メディア・大量破壊兵器以前以後といった観点で機械の思想史を整理することが可能になる**。

4. 最後に、通時的な機械の思想史を整理した上での結論として、「政治の審美化」概念の有効性について明らかにする。政治の審美化は、必ずしもファシズムに向かう時代状況の中でのみ発生する特殊な美学・政治の間の関係のあり方ではなく、**政治組織と技術が複雑な発展を見せる社会であれば普遍的に見られる現象であり、政治が感性的なものから切り離せない以上、審美化に批判的な論者であっても政治に言及する際には必ずしも免れているとは限らない**こともまた示される。

申請者氏名 長谷川晴生

(3) 研究の特色・独創的な点

次の項目について記載すること。

- ①これまでの先行研究等があれば、それらと比較して、本研究の特色、着眼点、独創的な点
- ②国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、意義
- ③本研究が完成したとき予想されるインパクト及び将来の見通し

① 美（芸術）を支えるものとしての技術に焦点を当て、美と技術の関係について行われた思想的研究であれば、(1)で挙げたフーコーやキットラーのものが存在しており、現時点では私の研究に最も近い問題意識を持ったものであると言えることができる。本研究も、この両名の強い影響の下に行われつつあるものである。しかし、**美と政治を媒介するものとしての機械に着目した研究は未だ殆ど見られないものであり、本研究に独創性が認められるのは、技術・美・政治の三者関係を主題とし、その三者関係を必ずしも後期近代に限定せずに通時的に把握することを試みた点**であろうかと思われる。

② 「政治の審美化」という現象の解明というテーマについては、現在までの研究で述べたように、やや思想史研究の中で手薄な分野であったことは否定できないが、近年はこの主題に光が当てられる傾向にある。とはいえ、大半の研究は神話や芸術作品の読解を通じてアプローチを行うものであり、**機械論に注目した本研究は「政治の審美化」に関する一連の研究の中で、独自の意義を持つものと考えられる。**

③ 本研究のインパクトとして想定できるのは、「政治の審美化」という概念の普遍性が明らかになることであろうと考えられる。これまで主に後期近代（20世紀以降）の政治体制についてのみ言及されてきた「政治の審美化」であるが、美と政治を媒介するものとしての機械に着目した通時的な比較研究を行ってみると、**政治制度と技術が一定程度以上発達した社会であれば、容易に見出すことができる**思考・現象であることが明らかになった。この結論は、本研究のヨーロッパ思想史への貢献の成果として、大きな意味を持つものであろうと考えられる。

(4) 年次計画

(1年目)

博士課程の一年目においては、(2)の②で述べた1の作業、即ち20世紀前半の機械論についての比較研究を中心に行う。これは、ユンガーの機械論をテーマとした修士課程時代の研究の継続でもあり、基本的に博士課程進学後すぐに行うべき作業であるといえる。

具体的には、

- ・ハイデガーに関しては、彼がテクネー論について述べた文献を整理し、読み進める。さらに、ハイデガーは往復書簡で理論的問題に言及することが多いため、こちらも読解対象とする（ただしユンガーとの書簡集は未公開である）。
- ・未来派については、マリネッティらが主にフランス語で執筆したエッセイを読解対象とする。新聞などに発表されたものも多いため（「未来派宣言」など）、公開されていないものは直接原資料を調査する。
- ・ユンガーについては、修士論文で分析した戦間期の著作に加え、戦後のものについても調べ、機械観の推移をまとめる。また、ユンガーは改訂時に著作を大幅に書き換える傾向があるため、可能であれば初出を探し出して全集版と比較する。
- ・上記のような事情で新聞や雑誌が必要になり日本で入手不可能であった場合、この年の春期休暇で渡欧（独・仏）し、文献調査を行うことを考えている。

最後に、博士論文の原型として、ユンガー・ハイデガー・未来派を比較した論文を執筆する。

(2年目)

博士課程の二年目では、(2)の②で述べた2の作業、つまり一年目で扱わなかった時代の機械論についての研究を中心に行う。アリストテレスやウィトウルウィウスについても、可能な限り原典を読解対象とし、言葉遣いも含めた精緻な検討を行う。

なお、この年は基本的に公開されている資料を中心とした読解を行うため、渡欧の必要はないが、一年目の資料調査が不可能であったり不十分であったりした場合に限り、夏季休暇で渡欧する場合がある。

最後に、博士論文の原型として、機械の思想史をテーマとした論文を執筆する。

(3年目) (DC2は記入しないこと)

これまでの成果に基いて、機械の思想史を媒介とした美学—政治思想史をテーマとした博士論文を執筆する。